

「キリストとともに天上に座っています」

エペソ 2:4-7(新改訳聖書2017)

- 4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、
5 背きの中に死んでいた私たちが、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。
6 神はまた、キリスト・イエスにあつて、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。
7 それは、キリスト・イエスにあつて私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来るべき世々に示すためでした。

いっしょに礼拝し、いっしょに聖書から学ぶ機会を与えてくださり、ありがとうございます。きょうの題は、「キリストとともに天上に座っています」です。しかし、この題を聞かれますと、「それは間違っている。私たちは、今はまだ天にいない。死んだときに、クリスチャンは、霊が天に行くのです」と言われるかもしれません。そのコメントは正しいです。しかし、聖書は、私たちが「キリストとともに天上に座っています」とも言っています。

では、祈って、聖書箇所を見ていきましょう。

祈り:

父なる神様、私たちがイエスを救い主と信じた時に、救ってください、ありがとうございます。私たちの罪を赦してくださいただけでなく、私たちがキリストとともに座らせてくださいました。私たちがイエスのどんなに近くに座らせてくださっているのか、どうぞ教えてください。私たちの目を開いてくださり、あなたのみことばを分かせてください。イエスの御名によって祈ります。アーメン。

1. キリストとともに生かしてくださいました v4-5

では、エペソ 2章4節から見ていきましょう。

エペソ 2:4

4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださいましたその大きな愛のゆえに、

神は、その大きな愛のゆえに、何をしてくださったのでしょうか？ 私たちが天国に行けるようにしてくださいましたのでしょうか？もちろんそれは正しいです。しかし、ここではそう書かれてはいません。

その大きな愛のゆえに…

エペソ 2:5

5 背きの中に死んでいた私たちが、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。

<背きの中に死んでいた私たち> これは、私たちの身体や心は生きていて活発であっても、多くのことを成し遂げたとしても、私たちの霊は死んでいるということです。では、私たちの霊はどんな働きをするのでしょうか？ 私たちの霊は、私たちが神を感じ、神と交流できる部分です。私たちの霊が死んでいると、私たちは神を知ることができません。神の愛や神のさまざまなことを感じることはできません。神との間のこのギャップは、私たちが神に背いたことや罪のためにできてしまいました。でも、私たちがイエスを救い主、主と信じるときに、神は、私たちがキリストとともに生かしてくださいます。

キリストが私たちの罪のために死んでくださったので、私たちの罪は赦され、私たちは天に行くことができるようになりました。それは正しいです。しかし、ここで強調されているのは、神が私たちを<キリストとともに生かしてください>ということです。

多くのクリスチャンが、ヨハネ3:16は、聖書全体の要約だと言います。

ヨハネ 3:16

16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

ですから、だれでもイエスを信じる人は、永遠のいのちを持っています。時には、クリスチャンの方が、「私はクリスチャンです。ですから、天国に行ったら永遠のいのちをいただけるんです」と言われることがあります。これは正しくありません。この永遠のいのちは、神が、キリストが持っておられるいのちです。

神は実に私たちを愛された。ですから、私たちがイエスを信じるときに、私たちは永遠のいのちを持ちます。私たちは神の愛を感じ、神を身近に感じます。まだ天に行っていないなくても、そのようになります。

この世の多くの人は、宗教はどれも何かしら同じようなものだと思っているようです。キリストはクリスチャンを救う、それなら、仏教は仏教徒を救うと。それは真実でしょうか？

日本で最も信徒数が多い仏教の宗派は、浄土真宗です。信徒数が1500万人だとしています。浄土真宗の開祖は、親鸞です。13世紀に働きをしました。親鸞は念仏（「南無阿弥陀仏」を唱えること）に打ち込みました。「南無」は、「帰依する」、「信頼する」という意味があります。「阿弥陀仏」は、「アミッターバという仏」を指します。ですから、「南無阿弥陀仏」は、「アミッターバ仏に帰依する、信頼する」という意味です。

親鸞は人々に、念仏、すなわち南無阿弥陀仏を念じることを、50年以上にわたって教えました。

親鸞の言葉は『歎異抄』という冊子に記されています。数年前に、私は、親鸞が実際にどのようなことを教えたのかを知りたいと思って、読みました。そして、ある個所で、驚いてしまいました。これがその個所です。

親鸞の言葉（『歎異抄』第2章から 現代語訳）

「私は、念仏が浄土に生まれる要因なのか、それとも、地獄におとしめる行為かどうなのかは本当に知らないのです。」（浄土に生まれる = 極楽に行く）

ここで、親鸞は、自分が浄土、極楽に行くことができるのかどうか本当に知らないと告白しています。親鸞は、人々が浄土に行くために南無阿弥陀仏を唱えるように教えることに献身しているのに、自分がそこに行く確信がないということです。

クリスチャンとして、私は人々がイエスを信じていかれるように導かせてもらいます。だれかがイエスを救い主と信じて告白されれば、聖書が約束しているように、その人は救われ、永遠のいのちを持っています。その信じた時か、数日のうちに、その人は永遠のいのちを持っていると感じ、救われていることを確信していかれます。ですから、その人たちが永遠のいのちを持っていることを、私が説得する必要はありません。

エペソ 2:5

5 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。

ここで強調されているのも、「やがて天国に行けます」ではなく、< (神が) 私たちをキリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。>

エペソ 2:6へ進みます。

2. キリストとともに天上に座らせてくださった v6-7

エペソ 2:6

6 神はまた、キリスト・イエスにあつて、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。

<ともによみがえらせ>

キリストは、十字架で死なれて、三日目によみがえられました。

私たちは、キリストを信じたときに、神の永遠のいのちが与えられました。これは、すべてのクリスチャンにとって、すでに起こったことです。しかし、私たちの体はまだ死んでいませんので、私たちの体が今よみがえるということはありません。この5節の意味は、私たちがキリストを信じたときに、神がキリストの永遠のいのちを私たちに与えて、私たちの霊をよみがえらされたということです。

<ともに天上に座らせてくださいました>

これも過去形です。私たちがイエスを信じたときに、神がしてくださったことです。

天上で、神が私たちをキリストとともに座らせてくださいました。

ここで、私たちはイメージを描けます。すべてのクリスチャンが、今、キリストとともに座っています。少し大きめの椅子か、小さな長椅子に、イエスと自分がいっしょに座っています。すべてのクリスチャンが、今、キリストといっしょに座っています。

もし、私たちが、たとえば、総理大臣とか、天皇陛下とか、特別な偉い人と、同じ椅子にいっしょに座ったらどんな気持ちでしょうか？ 肩が触れ合うかもしれません。私たちは、そのいっしょに座っている人の温かさ、愛、心を直接に感じるのではないのでしょうか。

聖書は、これがイエスと私たち一人一人との関係だ、と言っています。

ある年配のクリスチャンの婦人が、こんなことを言われていました。「イエス様が私を救ってくださったから感謝です。私でも問題なく天国に入れていただけます。そして、私は天国の隅の方に座らせていただくでしょう。」

その婦人が思い描いておられた天国は、イエスが中心に座っておられ、偉大な第一級のクリスチャンがその周りにいて、第二級のクリスチャンがそれを取り囲み、という情景かと思います。彼女は、自分自身を、普通の、あまり重要ではないクリスチャンだと思っておられたようですが、ですから、天国でもイエスから離れたところがふさわしいと言われたのでしょう。

天には、莫大な数のクリスチャンたちがいることでしょう。

しかし、聖書のメッセージは、「すべてのクリスチャンが、今、イエスといっしょに天上に座っている」です。

エペソ 2:7

7 それは、キリスト・イエスにあつて私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来るべき世々に示すためでした。

<来るべき世々>とは？

パウロは、この手紙を1世紀に書きました。ですから、2世紀は来るべき世です。3世紀も、4世紀も、そして、10世紀も、今の21世紀も、来るべき世です。そして永遠に至るまでそうです。ですから、使徒パウロがこれを書いてからのすべての時代が、来るべき世々になります。

<キリスト・イエスにあつて私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、・・・示す>

神は、どのように、この限りなく豊かな恵みを示されるのでしょうか？ 私たちに与えられた慈愛によって

です。つまり、イエスと私たちとの間の親しい豊かな関係の中にです。能力や、権威の中にはありません。イエスとの親しい関係、イエスと一つであることの中に表れていきます。私たちが、イエスご自身から直接に、密に感じていく中にです。すべてのクリスチャンがキリストといっしょに座り、いつもキリストを身近に感じていく中にです。この中に限りなく豊かな神の恵みが表れていきます。

イエスご自身が、これと同じようなメッセージを弟子たちに語っておられる、有名な個所があります。

3. キリストご自身を知る マタイ 11:28-30, 27

マタイ 11:28

28 **すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**

この聖句は好きですか？ イエスは、すべての人に、イエスのもとで休みを取るようにと招いておられます。でも、私は、この聖句はあまり好きではありませんでした。

私は、この聖句は、クリスチャンを甘やかして、弱くしてしまうと思っていました。私たちが、簡単に「イエス様、もう疲れた。休ませて」と言い出すなら、それは安易なことでしょう。

たとえば学校でも、簡単に保健室に行ってしまうよりも、頑張って教室にいて授業を受ける方が良いはずだと思っていました。

クリスチャンは、「私はできる限り、しっかりと立って責任を果たします」というのがあるべき姿だと思っていました。

ところが、イエスは言われます。

<すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。>

さらに、

マタイ 11:29

29 **わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。**

<くびき>とは何でしょうか？

くびきとは、一本の木の棒で、2頭の牛や、馬や、ろばなどを一つにつないで、それで、鋤や荷車などを引かせるものです。

<あなたがたもわたしのくびきを負って、>

と言われると、私たちの方も、「あなたは『休ませてあげます』と言われるのに、イエス様のくびきを負ったら、その半分の重荷を私が負うことになります。その上、私は自分の重荷もありますのに」と言いたくなるのではないのでしょうか。

しかし、イエスは言われます。

<わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。>

ここで、「イエスのくびきを私たちが負う」というのは、実際には、イエスは約束された通りにしてくださいと、イエスに信頼することになります。

私たちがイエスのくびきを負うというのは、私たちがイエスを信頼することを意味していますし、イエスに私たち自身の責任をとっていただくようにと、私たちが招かれているということです。

イエスのくびきを負うことで、イエスが私たちの責任を負ってくださいます。

そして、イエスといっしょに歩みます。

ですから、私たちは、「イエス様、あなたのくびきを負わせてください。そして私のすべての責任を負ってください」と言うことができます。

マタイ 11:30

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

前に、東京で働いている私の娘に2年前に起こったこととお話しさせていただいたと思います。娘は、脳の動脈瘤が破裂しました。血管のコブが破れたのです。ですから、脳の中に出血しました。すぐに入院をして、手術となりました。そのために頭蓋骨を大きく切り取ることになります。

手術の日に、私たちは病院に行きました。待っていると、呼び出されて、娘は手術の過程で使うある薬品に反応してアナフラキシーショックを起こしたということで、血圧が急降下してしまいました。手術は翌週に延期となりました。私たちはまた行きました。手術は10時間以上かかりましたが、成功でした。その翌日に、主治医が娘の脳の血管を検査すると、もう一つの動脈瘤が見つかりました。ですから、さらにその翌週にもう一度手術となりました。今度は9時間以上かかりました。そして、成功でした。手術のたびごとに、その三日前に、私は病院に行き、説明を聞き、承諾書にサインをしなければなりません。ですから、娘が退院するまでの1カ月半の間に、東京に8回行かなければなりませんでした。その間に、私は、毎日曜日の説教と、神学校で毎週1クラスを担当しなければなりませんでした。普通でしたら、これ二つだけで、私の予定はほぼ一杯になってしまいます。しかし、私には、頑張らなければならないという思いが全くありませんでした。神様が私にさせようとしておられることは何でも全部させてくださるから、という思いが、いつもありました。ですから心配する必要がありませんでした。ただ、一つ一つのことを神がさせてくださる、という信頼がありました。

その間に、私の友人の牧師から、その教会で、国際カップルの結婚式の司式をして欲しいという依頼がありました。新郎はインド人、新婦は日本人です。まず打ち合わせのために出会いました。私が2か国語でのプログラムを作り、司式とメッセージを、英語と日本語でさせてもらいました。この結婚式の準備の中で、急遽、新婦は、バプテスマを受けることになりました。神がしようとしておられたことをされました。

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

これは、そのまま真実です。私は、神が本当に完全に私を助けて、導いてくださり、毎日毎日、神がいっしょにおられて、私にさせようとしておられることをすべてさせてくださる方であることを知りませんでした。

私は、枚方で35年間牧師をしてきました。その後、名古屋の北にある教会で7年間、非常勤で牧師を、今年の3月までしました。ですから、42年間牧師をしてきました。娘の手術に関して私が経験したのは、2年前のことです。それまで、私は、牧師としてベストを尽くさなければならない、そしてさまざまなことを成し遂げなければならない、とと思ってきました。しかし、この2年間は、イエスといっしょに歩むということを学び、経験しています。

私たちの最善を尽くそうとするよりも、イエスとともに歩むということは何と平安に満ちたことでしょうか。イエスが私とともに、すべてを成し遂げてくださることに信頼しているのです。

つい最近教えられた、もう一つのことを語らせてください。

私たちが、今見てきた箇所のお前の節です。

マタイ 11:27

27 すべてのことが、私の父からわたしに渡されています。父のほかに子を知っている者はなく、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかに、父を知っている者はだれもいません。

この節は、少し難しいように思えます。

イエスは、神からすべてのものを受けておられます。そして、父だけが、イエスのすべてを知っておられます。私たち人間は、父なる神のことは、ほんの少ししか分かりません。しかし、キリストは父のすべてを知っておられます。

さらに、<子と、子が父を現そうと心に定めた者>は、父を知っているということです。

では、<子が父を現そうと心に定めた者>とは、だれのことでしょう。

これは、私たち、クリスチャンのはずです。

ですから、イエスと、イエスが父を現そうと心に定めた者、クリスチャンは、父を知っているのです。

言い換えると、クリスチャンは、イエスが父を知っておられるように、そのように十分に父を知ることができるということです。同様に、この箇所から導かれることは、クリスチャンは、父がイエスのすべてを知っておられるように、そのようにイエスのことをよく知ることができることにもなります。

この節では、<知っている>ということばが2回使われています。<子を知っている>と<父を知っている>です。

<知っている> (2回)

[ギノースコー]	知る(一般的に、最も良く使われる)	×
[エピギノースコー]	知り尽くす、はっきりと知る	○
([エピ] 上に、強調のため)		

新約聖書では、<知っている>という意味で、最もよく使われるギリシア語は、[ギノースコー]です。しかし、この節では、「知り尽くす」とか「はっきりと知る」という意味の[エピギノースコー]が2回とも使われています。つまり、キリスト・イエスが、私たちに父なる神を現そうとされますと、あるいは、イエスがご自身を現そうとされますと、私たちは、十分に、はっきりと、知ることができるということです。つまり、私たちは、父なる神を、イエスを、身近に、豊かに知ることができます。

では、私たちがどうすれば、そのようにイエスを、父を、よく知ることができるのでしょうか？

そのことを、イエスご自身が、次の、28節、29節、30節で説明しておられます。今、私たちが見てきたばかりです。

祈りましょう：

父なる神様、あなたはイエスを信じた私たちを確かに天の御国へと導いてくださいます。しかし、あなたはすでに、私たちがイエスといっしょに、本当に身近においていてくださっています。そして、あなたは、いつも、私たちに、イエスのくびきをイエスといっしょに負うように、そのようにして、イエスと一つであるように、と招いてくださいます。あなたは、私たちを通して、イエスの柔和、へりくだりが現れるようにと願っておられます。私たちがいつもイエスといっしょにいて、一つであるように、私たちが助けて、導いてください。イエスの御名によって。アーメン。